

教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告 ——'92年秋～'93年夏——

小 嶋 秀 夫

1993年1月初めから5月末まで、ミシガン大学の客員教授に招聘されてアメリカに滞在したときのことから記す。任用は、Toyota Visiting Professor of Japanese Studies and Psychology, College of Literature, Science, and the Arts, the University of Michigan, the 1993 Winter Term であり、中心の仕事は大学院セミナーを1コマ（1回3時間）担当することであった。それは Social, cultural, and historical perspectives on human development in Japan の題目で14回行った。そのほか、同大学の Center for Japanese Studies および Center for Human Growth and Development で Brown-Bag Lecture をした。各題目は次の通りである。Family life and child development in 19th-century Japan. The developmental significance of nurturance in children and adults.

上記の滞在期間中にニューオルリーズで開催された SRCD (Society for Research in Child Development) の60回記念大会に出席して研究発表を行うとともに、ノース・キャロライナとユタ州・ソートレイクシティに招かれて講演・講義をしたり集会に参加したりした。まず、ノース・キャロライナでは、Duke大学で発達心理学の受講学生に話しをした後、University of North Carolina at Chapel Hill で4つの会合に出席した。その中心をなすのは、Carolina Consortium on Human Development で Glen Elder, Jr. とともに話題提供することであり、私は Implicit historical models と Hypothetical dialogues between historical eras について話した。Utah 大学では、上記の歴史の話の他に Life course concepts in Japan : Socio-cultural systems and persons in relationships という題目での話をした。

アメリカから帰国後、7月15日から28日にかけて、ブラジルの Recife とその近郊での学術集会に参加した。まず、ISSBD (International Society for the Study of Behavioral Development) では、Jaan Valsiner

とともに1つのシンポジウム (New perspectives in culture-inclusive developmental psychology) を企画して自ら発表もした (Ethnopsychological pool of theories of child-rearing and human development : Its functions in cultural and historical perspectives)。また、別のシンポジウム (Historical developmental psychology) では、指定討論者となった。そのほか、2日間のワークショップ (Latin American Pre-conference Workshop on Children and Youth at Risk) にも参加した。これらの会議が終了した後で、Sarrambi で開催されたワークショップ Determinism and Indeterminism in Development (8カ国、27名の発達心理学者が参加する討論集会) に参加した。

これらの成果が、論文や本として出るのはかなり先のこととなるが、すでにいくつかの計画が進行している。

【歴史的・文化的発達研究】

論文がジャーナルに載ることになった : Japanese child-rearing advice in its cultural, social, and economic contexts. *International Journal of Behavioral Development*. その中で、最近に提起した概念 (EPI: Ethnopsychological Pool of Ideas) が扱われている。常識心理学とエスノ心理学の問題は、次の論文でも扱っている : 「パーソナリティ形成についての文化的概念」原岡一馬 (編)『人間の社会的形成と変容』(Pp. 24-35 ; 271-272.) ナカニシヤ書店, 1993年3月。

【家族関係 ; 社会的相互作用・対人関係と発達】

家族心理学会での講演内容のあらましが現れた : 「親子関係研究の今日的課題」家族心理学年報11, 1993, 91-102. 金子書房。

また、小学生の社会サポート体制と学級適応に関する研究を発表した : Kojima, H. & Miyakawa, J. Social support and school adjustment in Japanese elementary school children. Poster presentation at 60th Anniversary Meeting of the Society for

Research in Child Development, New Orleans, March, 1993. また、その追跡データ(宮川充司氏と共同)を、日本教育心理学会第35回総会(名古屋市, 1993年10月)で発表することになっている。

【発達概念と発達論】

日本教育心理学会第35回総会(名古屋市, 1993年10月)で、研究委員会企画シンポジウム『教育心理学の研究・教育における遺伝学の役割』(企画・子安増生)で、「発達心理学からの提言」をすることになっている。

【テキスト・辞典等】

テキスト1冊を編集するとともに、1章「発達、学習と教育」を書いた:小嶋秀夫(編)『発達と学習』(Pp. 11-30.)協同出版, 1993年4月。また、放送大学の講義(テレビ)のための印刷教材の3つの章を執筆した:「日本近世の子育ての心理学:現在の子育ての源流」(Pp. 27-37.),「前世紀末からの発達研究の中での子どもと親」(Pp. 38-46.),「育ち行く親と子」(Pp. 47-56.)三宅和夫(編)『乳幼児の人格形成と家族関係』放送大学教育振興会, 1993年3月。

次の2冊の事典・辞典の項目を執筆した:『新社会学

辞典』(Bronfenbrenner ほか22項目)有斐閣, 1993年2月;『現代学校教育大事典』(親子関係ほか6項目)ぎょうせい, 1993年7月。

【その他】

市販誌に「保育における児童観の役割とその文化的基礎」というエッセイを書いた:森上史朗(編)『新・保育入門』(別冊発達14) Pp. 124-133. ミネルヴァ書房 1993年5月。

また、2つの国際的学会のニュース・レターと雑誌にかんたんなエッセイと書評とを書き、ともに近く現れることになっている。1) Historical perspectives on child-rearing and human development. *ISSBD Newsletter*, 1993, Fall, p. 5. (International Society for the Study of Behavioral Development). 2) Book notice: Stevenson, H. W. and Stigler, J. W. (1992). The learning gap. *Child Development Abstracts and Bibliographies*. (Society for Research in Child Development).

(1993年9月7日)

研究経過報告

速水敏彦

この欄に昨年度は報告しなかったので2年間に行った研究活動の概要を述べることにする。まず、その間にまとめられ、報告された研究は次のとおりである。

研究論文

- (1) 技能学習の動機づけ 1992 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 39, 63-75. (潘益平と共著)
- (2) Spontaneous causal attributions: A cross-cultural study using the sentence completion test. 1992 *Psychological Reports*, 71, 715-720.
- (3) 外発的動機づけと内発的動機づけの間—リンク信条の検討— 1993 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 40, 印刷中
- (4) 動機づけ機能としての自伝的記憶—感動体験の分析から— 1993 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 40, (陳恵貞と共著) 印刷中

分担執筆

- (1) 動機づけの形成と変容 1993 原岡一馬編「人間の

社会的形成と変容」ナカニシヤ出版 99-108.
(2) 学習の動機づけ, 学習の仕方の個人差 1993 原岡一馬編著 教育心理学 日本放送出版協会 110-124.

雑誌

- (1) こんなとき子どもは自信をもつ 1993 児童心理 8月号 1-8.
他に今のところ印刷物にはなっていないが取り組んだものとしては「動機づけの発達」の問題がある。これまでに動機づけの発達に関しては国内はもちろん、国外でもあまり探究されておらず、大学院の授業や動機づけの研究会等とおしてその問題について考えてきた。そこで筆者が中心となって数人の共著のかたちで「動機づけの発達心理学」という書物を有斐閣から出版する計画をたて、進めてきた。現在のところ原稿もほぼ集まり、来春の2月には出版される予定である。発達段階にそって5章から構成されるものであるが、筆者はこれまでの動機づけ研究が特に手薄な就学前と大人および老人の動機